

テル・アビブ上空一万フィート

「序章」第9号（一九七二年）

ライラ・ハリド

この文章は、パレスチナ解放闘争の歴史の中で、シャディア・アブ・ガザレの指揮による「アラブパレスチナ解放・人民戦線」(乗取機のコールサイン・訳者註)の闘いとして知られているTWA八四〇便に関する報告である。ライラ・ハリドは一九七〇年九月十三日付の「サンデー・タイムズ紙」上でこの劇的な物語について語っている。

自分の故郷を、ハイジャックをしなければ、再び見ることができないなんて恐いことではないだろうか。でも、ハイファが、今そこに見えるのだ。パイロットの後に座り操縦室の窓から見ると、丁度頭越しに左後方に遠ざかって行く。ロッド空港に接近し一方二千フィートの高度へ降りて来ると占領されたパレスチナ、そこを「イスラエル」だと言う人もいるけれど、我が故郷の美しい海岸が見えて来た。

さわやかに晴れ上がった日だった。しかし我々はこの冒険の最も

緊張すべき危険な局面に近づいている。美しい眺めを楽しんでいる暇はなかった。パイロットは今までのところ私の命令通りに働いてきてけれど、何とかしてロッド空港に着陸させようとするだろうか。イスラエルは、我々を強制着陸させようとするのではないだろうか。全ては二日前ローマから始まった。ヨーロッパへやって来たのは私には始めてのことだったが、ローマは素晴らしい街だった。すごく疲れていたの私は着くなり、十時間ぐっすり眠った。飛行機に乗る前の日の夕方、ボルゲーゼ公園からテレビの泉まで街を散歩した。もちろん私は泉で伝統どおりにコインを投げた。再びローマへやって来れるように願いをこめて。でも、イタリア人は、今度来たときもローマを見せてくれるだろうか。泉の側の喫茶店に一人の女性歌手がいて、私は二時間程その歌を聞いていた。その日、他にやったことは、フランス製の香水を一瓶買ったのと、TWAの事務所で翌日のアテネまでの切符の予約を確かめただけだった。その夜は夕食を食べる気がせず、眠りについたのは朝の三時だった。目が醒

めてからも食欲がなかった。お腹は空いていたのだけれど、コマンドの訓練や、子供の頃よく食べ物に不自由した経験で、空腹には慣れていた。

その朝、一九六七年八月二十九日、一寸買物をしなければならぬのでヴィア・ヴェネトの洒落れた店へやって来た。大きなサンダラスと、大きな皮のシヨルターバッグと、一五、〇〇〇リラもしたつば広の帽子を買った。不愉快な程の無駄づかいになったけれど、これが普通のファーストクラスの旅客に見せるためのユニフォーム一式だった。

ホテルへ戻って着替えをした。衣服には別段関心が強いわけではなかったが、着陸した後で飛行機を爆破し、燃やしてしまうのも勿体ないので、スーツケースにつめるものだけ減らした。ハンドバッグに服を二枚つめ、二着のパンタロンスーツを重ねて着た下のはサイケデリックな花模様で、他人の借物だったので返したいと思っていたのだ。上に着たのはとてもスマートな白のコットンノースリーブだった。それにサンダルをはいた。

八四〇便は遅れていたの、ラウンジで三十分程余分に待たなければならなかった。私は「チェ・ゲバラ」コマンド部隊のもう一人のメンバーの青年の目星を付けた。彼を、写真で見たことがあるだけで逢ったことはなかった。私達は確認のための秘密サインだけをしてお互いに知らぬふりをしていた。この飛行機に乗る前の余分な待ち時間は不安で、二つの出来事が私を狼狽させた。旅行に行くことではしやぎまわっているとも幸福そうな四人の幼い子供を連れられたアメリカ婦人に私は気づいた。もしも失敗したら彼らの身にどんな恐いことが起るかと思うと、衝撃を受けた。私は子供が好き

だ。この飛行機には乗らないで」とその婦人に言おうかと思った。けれども、我がパレスチナの物心もつかぬままに殺されていった子供達のことを思い出し、少しづつ力と勇気が湧いてきた。

二つ目の出来事は飛行機へ行くまでのバスの中のことであった。私の隣りに座った男が「どこから来たのですか」と尋ねた。私はボリビアから来たという。彼はシカゴで十五年間暮してアテネへ帰るギリシャ人だといった。末亡人になっている母親がアテネの空港まで迎えに来ているそうである。これも私にとっては衝撃だった。我々パレスチナ人は自分の故国を離れることがどんなに悲しいことかよく知っているし、私にも父と死別した母が家で待っているのだから一層よくその気がわかるのだ。彼は話しを続けていたけれど私は後はもう聞かないでいた。

私と仲間の青年は操縦室に一番近いファーストクラスに席をとった。ファーストクラスは五人しか乗客がいない、その上三人の客室乗務員が私達のまわりをうるさくつきまとって、私達にとっては全く迷惑なかりであった。離陸してすぐに私達二人は扉に近い一番前の列に席を移した。

私達は二人とも昼食前の酒を断った。もともと私はいつも飲まないのだけれど、それに、膝の上にお盆をのせられては具合が悪いので昼食も断わった。けれどもスチュワードが大げさに喚き立てるので、目立たないように私はコーヒを注文し、友人はビールを頼んだ。彼は気分が悪いのだと思わせるために薬をもってくるように頼んだ。

客室乗務員は簡単には立ち去ってくれなかった。昼食の代りに彼らは果物やケーキを積んだ大きなワゴンを運んで来て、しかも慌て

たことには、私達が勝手に取れるようにと、私達の前に止め、操縦室への扉を完全に塞いでしまった。ローマ・アテネ間の飛行時間は九〇分間なので、離陸後三〇分から一時間の間に飛行機を乗っ取るよう命ぜられていた。時間が迫っている。不審に思われるといけないので、ワゴンをどけてくれるように頼めない。一年も経ったかと思う程待つてようやくホステスはワゴンを運び去り、扉のすぐ右のソファにいた乗客も立ち去った。

邪魔なものではなく誰一人驚かせることなく操縦室へ入れるようになった。びっくりした人が馬鹿げた行動に出るような事態は避けたいと思っていたのだ。

私はホステスに毛布をかけてくれるように頼んだ。友人はいぶかし気な顔付で、怖気づいたのではないかと心配しているらしかった。彼を安心させるために、化粧ケースを取り出して髪を整えて、落ち着いていることを見せた。そして時計を見て、私は五本指でサインを送った。五分以内に決行するという合図だ。合図をするのは私の役割だったのだ。

毛布の下で、このために私は毛布を頼んだのだ、シオルグーバッグからピストルを取り出し、ズボンの腰にはさみ、手榴弾の安全ピンを抜いた。

準備完了。丁度そのとき、一人のホステスがお盆を運んで入ってきた。彼女は肘でドアを押え外へ開いている。今がチャンスだ。友人はピストルと手榴弾とを手にホステスの前をすり抜けドアを入った。ホステスは武器を見て、「オー・ノー」と絶叫し、お盆を放り出した。今度の行動の中で、暴力的な出来事といえばこれくらいのものであった。

私達は操縦室へ押し入り、友人が叫んだ。動くな。さあ、新しい機長の命令に従ってもらおう。

機長は素早く無線で報告した。

武装した二人が入って来た。ハイジャックだ。

乗っ取りでの私の役割は、ピストルと手榴弾で威嚇し乗員の動きを制することだった。けれど、手榴弾を手にして立ち上がり、腰にはさんだピストルに手をかけようとしたとき、ピストルはズボンの中をすべり落ちて行ってしまった。一日中何も食べてなかったので腰回りがゆるんでしまっていたのだ。笑っている場合ではないのだが、苦笑してしまった。ピストルを振り回して敵を威嚇するどころか相手に背を向けてかがみこんで二本のズボンの上から武器よいずこ、と手さぐりをする始末である。機長は椅子をめぐらして新しい機長を見ようとしたけれど、これでは大きな白い女性用の帽子のテッペンが見えるだけだった。

意地悪なピストルを手に取り直して、ポケットにしまった。ピストルはもう使わなかった。余りハリウッドじみた脅しになるから。私が操縦室へ入って「私が新しい機長だ」と名乗ったときの機長の驚いた表情といったら無かった。何と哀れにもこの男の目に映ったのはノースリーブの服にピラピラした帽子とサンダル姿の私なのだから。

私が新しい機長です。記念にこれを差し上げます。この手榴弾の安全ピンですの。

私はそういって、彼の鼻先にそれを差し出した。

これでいつでも爆発するわ、この手榴弾。命令に従わなければ、使いますよ。飛行機も、この中の人も全部吹っ飛ばしましょうね。

要求はなんだ。

ロッド空港へまっすぐ向って丁戴。

ロッド空港へ？我々はアテネへ飛んでいるんだぞ。

英語はお訳りになるんでしょう。

私は副操縦士に突っぱねるようにそう言った。

私達はパイロットのまうしろの二つの座席に坐った。手榴弾は着陸するまで、いつでも爆発するように左手に握っていた。友人の方は手榴弾をしまいこんでピストルを常に構えていた。私は無線用ヘッドフォーンを貸せと要求した。機長は狼狽して、私に帽子の上からそれをかぶせようとした。

帽子をとってくださらない？

リボンでくりつけてあったので、帽子を首の後ろに回せた。どうしても残しておきたい帽子だった。ローマ空港を呼び出したが、応答はなかった。

私は機関士の方に向きなおし「何時間飛ぶ燃料がある？」と聞いた。私は燃料計を読み取って知っていたけれど、彼を試してみたのだ。案の定、彼は嘘をついた。

二時間だ。

嘘つけ。三時間半飛べるじゃないか。燃料計を見ろ。どうして嘘をつくんか。今度嘘をついたら、ただじゃおかないよ。

どうしてそんなに怒るんですか。

私は嘘つきは嫌いだ。

そう答えたけれど私は、本当に怒ってはいなかった。命令を聞かせるため少し脅かそうとしただけだ。機関士はそれから一言も口をきかなかった。

時間はおおよそ15時20分だった。

操縦室の中のダイヤルやスイッチの類には戸惑ったが、私達は十分に訓練され、計器の表示を熟知し、ボーイング707について完全な知識を持っていた。

乗員を機内に釘付けにして、次に機内放送で乗客にこう話しかけた。

皆さん。ベルトを締めて、お聞き下さい。私は新しい機長です。パレスチナ解放人民戦線(P.F.L.P)チエ・ゲバラ・コマンド部隊は、このTWA機を乗っ取りました。全ての乗客に次の通達を固く守っていただくことを要求します。

- 1、席から離れず静かにして下さい。
- 2、あなたご自身の安全のために両手を首の後に回して下さい。
- 3、他の乗客の生命を危険にさらすことになるような動きをしないで下さい。

4、我々の行動の安全限度内で乗客諸氏の要求を考慮します。

皆さん、皆さんの中に多くのパレスチナ人や女や子供に死と悲惨な苦しみを与えた男がいます。私達は殺された人々に代って、この殺りく者をパレスチナの革命法廷に引き取り出すために、この乗取りを実行しました。他の乗客の方々は、英雄的パレスチナアラブ人民の名誉あるお客さまで、好意と友情によってなされます。宗教と国籍の如何を問わず、飛行機が無事着陸し次第、どこへでもお望みの所へ行く自由が保証されています。皆さん、私達の目的地は友好的な国で親切なる人民があなた方をお迎えいたします。ご協力ありがとうございます。それではよいご旅行を。

私達が迫及していたのはラビン將軍(前のイスラエル参謀総長)で

彼がこの便を予約していることは分っていた。しかし出発直前に予定を変更したようだった。名の知れたイスラエル人にとって今日では、エル・アル航空以外の飛行機を利用する方がより安全だと考えているという事はわかっていた。

私達は全世界に声明を発表した。

PFLPのチエ・ゲバラ・コマンド部隊がTWA八四〇便のボーイング機を完全に支配し、ローマから占領下のパレスチナ・アラブ領内のロッド空港へ向っていることを通告する。この飛行機の指揮をとるシャディア・アブ・ガザレ隊長とその同僚は全ての関係者にこの機との通信においては次のコールサインを使用するよう要請する。——アラブ・パレスチナ解放人民戦線。このコールサインを使用しない通信には応答の必要を認めない。

シャディア・アブ・ガザレは私のコードネームである。本当のシャディアはPFLPの女性レジスタンス戦士で、一九六八年十月、二十一才のとき殺された。

この後は機長に新しい航路地図を渡した。通常のアテネ・ニコシアを通るルートを使わず、ギリシャの海岸添いにまっすぐ南下しクレタ島のヘラクリオンの南東から、ロッド空港へ東進する。三三〇〇フィートの高度を殆んど海の上を飛んでいたので余り楽しい旅とは言えなかった。

新しいコースをとるとき、機長が南西に向かって旋回しているのに気付いた。リビアのトリポリに近いアメリカの空軍基地へ行こうとしたらしい。けれども私は羅針盤を見ていたので、コースへ戻るように命令した。それからは、羅針盤に従って、どの方位へ向うべきか正確に機長に指示をした。

私は機内放送で乗客にも自然な調子で、私達の闘争について説明した。私達はイスラエルを練っている根源を断ち切るためこのハイジャックをしました。イスラエルに行かないで下さい。イスラエルでは国内でも、その途中でも抵抗運動が起っています。お友達にも伝えて下さい。私達は祖国へ帰りたい。ユダヤ人と一緒に暮らすこともできます。以前はそうしていたのですから。私達は乗務員にも説明しようとしたが、真面目に聞こうとしなかった。

16時19分 方位一一二度

カイロ空港とのアラビア語での交信は面白かった。突然女の声で、何事が起り、私達がどこへ向っているのかを伝えてきたのでカイロは面くらっているようだった。そして最初に我々独自のコールサインを使わなければ応答しないと云ったので、びくりましたように途切れ〜に。アラブ・パレスチナ解放人民戦線ですが、あなたも、どこへ行くのですか。イスラエルへ。そしてイスラエルを解放します。

この後間もなく、ロッド空港に向って降り始めると事態は深刻になってきた。もちろん私達には着陸するつもりはないけれど、強制着陸させられるおそれは十分ある。しかし、私達は敵の上空を飛んで見せつけてやりたかったのだ。

高度1・2・0へ降下。操縦士に命令した。副操縦士がからかうように、「二、〇〇〇フィートのこと？」と口をはさんだので、「わかっていてでしょう」と強い語調で言った。

私達はずっと降りて行き、もやの中からパレスチナの海岸が次第にくっきりと見えてきた。一万二千に降りたらどうしたらいいのだと操縦士が聞いた。「二度旋回しましょう」と答えて、私は手榴弾を

十五分ほどして、友人が、乗客がまだ頭に手を回したままで、と教えてくれた。客室をのぞくとその通りだった。私は不自由な目にあわせたことを詫び、ホステスに食べ物、飲み物、お望みならシャンペンでも何でも欲しいものを出してくれるよう頼んだ。それ以外は着陸まで乗客や客室乗務員とは私達は一切接触をもたなかった。

私達は一生懸命に三人の乗務員に友好的な言葉を使っていたけれど無駄だった。食べ物や飲み物をすすめたが断られた。タバコをすすめても断られた。彼らは何一つ質問もしなかった。時々、機長は振り返って私を見ては、不信に満ちたように頭をふった。唯一の人間的な接触は副操縦士が学校の生徒のように、トイレットに行っても良いかと尋ねたことだけだった。

操縦士は私の左手の手榴弾が気になるらしく、チラチラ見ていたので、私は彼の背に手を回して手榴弾でトントンと肩を叩いてやり安心なさい。私はこれを扱い慣れてるんだから

と言って、どれ程扱い慣れてるかわからせるために、手榴弾で頭を掻いてみせた。だけどそれで彼が安心したかどうかは知らない。

15時55分 羅針盤方位一四〇度

この波乱の多い飛行の間で、穏やかな長い時間が、通過したイタリヤ、ギリシャ、アラブ連合、レバノン、シリアの国々にメッセージを送るだけ中断されて過ぎて行った。このメッセージで私達が何をしたいのかを説明し、パレスチナ人民の正当なる闘争を支持するようアピールし、次のような言葉でしめくくった。

アメリカ帝国主義とシオニズムを打倒せよ。我々は勝利する！副操縦士は私が「アメリカ」という度に怒ったように私をにらみつけた。

持った左手でぐるっと円を描いたので操縦士はビックリしながらそれを見ていた。「自分の国の上空をピクニックしてみたいんでね」と私は言った。

言うまでもなく、ロッド空港との交信は友好的に、というわけには行かなかった。管制官は非常に興奮して怒鳴りっぱなしだった。ロッド空港の波長に合わせて、まず初めに占領下の我がパレスチナ人民にアラビア語でメッセージを積み上げた。空港塔にアラビア語で呼びかけたが応答はなかった。「TWA八四〇ですか」と彼らは呼び続けていた。「うるさい！こちらはアラブ・パレスチナ解放人民戦線だ。このコールサインを使用しなければ応答しない。降りて行く。着陸する。場所を空けろ」

脅かすために私はこう言ったのだ。私達が着陸したくないと思っっている以上に彼らの方が着陸させたくないと思っっているらしい。上手くいった。ロッド空港塔は怒鳴り返した。降りて来るな。来るな。ミラーージュで撃墜するぞ。こちらアラブ・パレスチナ解放。お前達に何ができる。私は生命は惜しくない。ここは我々の国だ。祖国の上空で死ぬれば本望だ。しかし乗員と乗客の生命の安全はお前達の責任だぞ。(この間に高度は二万フィートまで降り、友人が機内放送のマイクを私の口元に近づけてくれたので、このやりとりを乗客も聞いていた。彼らにとっては余り気持ちの良い話ではなかっただろうけれど……)

地上からのミラーージュによる脅しは続いていた。前方を見ると、ミラーージュが飛んでいる。その中の二機はすぐ前にいた。降下を続けたが機長が「これ以上降りられない。前のミラーージュが非常に危険だ。」と私に言った。これはイスラエルが如何に私達の着陸を嫌が

っているかをはっきり示していた。副操縦士がロッド空港と話させてくれ、と私に頼んだ。彼はロッド空港に事情を説明した。我々は彼女の命令に従って降りざるを得ない。そうしなければ飛行機は爆破されてしまう。ミラージュをどけてくれ。そしてTW A八四〇と呼ぶのはやめてくれ。こちらは人民戦線だ。多分この言葉が効いたのだろう。ミラージュはまだ追って来たが少し遠ざかった。私達は高度一万二千フィートまで降りた。そしてロッド空港とテルアビブの上空を三回大きく旋回した。テルアビブ上空に七分間滞空し充分私達のデモンストレーションの目的を達した。私はロッド空港に最後のメッセージを送った。彼らが心配しつづけるように。一まずさようなら。又戻って来ますから。〃

17時12分 方位三五九度

私はパイロットに針路を真北にとるように指示した。彼は高度一万二千で燃料を使い過ぎたので上昇しなければ、と言った。私は一万五千まで高度をとれと命じた。

間もなく、ハイファが見えて来た。カーメル山の連なり、その下に見える港、右手には石油タンクと白い煙のたち昇るセメント工場。これが私の街です。よく見てちょうだい。私が生れたところよ。私は乗員達に言った。私の家があったところは地図で大体見当がついていたので見つけようと思ったのだけれど街はあまりにも早く過ぎ去って行ってしまった。操縦士にもう一度引き返して生れ故郷をよく見せて欲しいと頼もうかと思った。けれど、もう一分も無駄に出来ない程燃料が欠乏していた。

わずかに見えた風景と、子供の頃のおぼろげな想い出がパレスチナの我が家とともに記憶によみがえって来た。私は一九四四年四月

ないだろう。私達は自らの自由意志で離れたのではなく、シオニストによって計画的に無理矢理追い出され、帰りたいも帰れないのだ。この祖国へ戻る決意が、世界の他の「難民」の中でパレスチナ人民をとりわけ特異なものにしている。

飛行機がイスラエルとレバノンの国境を通過したとき副操縦士は心配そうに「ベイルートへ行くのか」と聞いた。あなたの知ったことではない」と私は言った。しかし、燃料がないのは知ってるだろう。知っている。それに泳ぎ方も知っているよ。何が起きたって。私も、燃料の状況は心配していた。だがラス・ナクラの向うに広がる美しく青い湾を飛ぶことにもっと興奮していた。ラスの反対側には私達がパレスチナを離れてから住んでいるティレの街がある。私達のアパートは海岸沿いにあり、まるでつまみとれるように見える。母は自分の娘が頭上はるか飛んでいるとは思ってもよらないだろう。私はレバノンでの最後の夕方母の所へ行き、夕食には帰るからとまで言ってきたのだ。母が心配するのはわかっていたが秘密にしておかなければならなかったのだ。何か起ったときのためにありきたりのお別れの手紙も置いてきていた。

水泳を習った海岸に波が打ち寄せるのが見える。私達はよくそこで時間を過ごした。映画館もなかったし、あっても金がなかった。右手の方に、この素晴らしい湾の先端に町のように見えるところがある。実は、パレスチナ難民九〇〇〇人のキャンプである。二十年間このようなキャンプが我がパレスチナ人民の新しい故郷になっていた。ティレに着いたとき私達は貧しくして十年間ずつと貧乏だった。ハイファでは私の父は金持ちではなかったが、かなり裕福な暮らしをしていた。父は織物商人で、小さな喫茶店を持っていて、二軒

に生れ、一九四八年三月頃母が八人の子供とハイファを離れたときにはまだ四歳になってなかった。私は、ある日顔を血まみれにした男の人が階段のところに倒れていたのを覚えている。私の母は、その男は家の周りで起ったアラブとシオニストのハイファ争奪の闘いの犠牲者だと言っていた。私の父は、アラブの戦士達と出て行き、ずつと家に帰らなかつた。そして父が家に戻って来たのは私達が家を離れた一週間後だった。父が絶対に家を離れないから荷造りの必要はないと言っていた荷物も母がまとめてしまっていた。市街戦は激化し、婦人や子供達は殆んどいなくなっていた。シオニストは進撃して来て拡声機で私達に立ち去るよう命じていた。後になって私達は母に、どうして家を離れたのかと聞いた。彼女は追い出されたのだといつも答えた。

確かに近くの街角でしょっちゅう戦闘があり、母は八人の子供と一人きりで頑張っていた。彼女が最初に呼びにやっただタクシーは銃撃され炎上した。二台目のタクシーに乗り込んだときすぐ近くで銃声があったのを覚えている。私達は慌てて立ちどまる暇もなく飛び出して、車が出る瞬間に、母は子供の数が一人足りないのに気づいた。それは私だった。私は階段の下にかくれていた。私は家を離れたくなかつたのだが母は、私が行きたがらないのはお父さんの楽しい思い出が家に残っているからだ、といって私をからかった。母は念入りに戸締まりし大きな鍵の束を持って家を出た。

私達の家族がどのようにして「難民」になったか分つてもらえただろう。しかしパレスチナ人民は本当は誰も「難民」ではない。我々は追われ、追い出された人民なのだ。もしも私達が難民で、避難する場所を見つけたのなら、私達は、離れた土地へ戻りたいとは思わ

の店を貸していた。もちろんこれらは全部失ってしまい、しかしもつと困つたのは他の人達と同じだが、英国の銀行だったのに預けていたお金を一銭もおろせなくなつたことだった。シオニストがパレスチナを占領したときは大変な混乱が起り、父からの音信が何ヶ月も途絶え私達は、父が死んでしまったのだと諦めてしまった。父はエジプトで死んだ。こういうことはよくあることだった。私はこのように近隣のアラブ諸国へ散り／＼になつた多くの家族を知っている。私達が父に再会したとき、父は病身で、高血圧で心臓が悪かつた。しかし父が実際に患らつて居るのは、家と仕事を失くしたことだった。これもまたよくあることだった。父と同じ年代の人々で自分の仕事を失い健康まで損つた人を何人も知っている。多分父は闘い続けようとしたのだろう。多くのパレスチナ人は新しい生活の中で成功していった。そうしなければ「難民」が生き抜くことは出来ないのである。

父は一九六六年に死ぬまで五年間病床にいた。幸い母がティレの出身だったのでティレへ来た最初の一年は母の伯父の一人の家に住んだ。それから二間ある家に移り、そこで十六年間暮した。家族は十四人になっていて混雑なんというところではなかった。それでもなお、テントで生活している人よりましだった。冬の嵐の間中テントが吹き飛ばされて学校に来れない友達もあつた。洪水でキャンプが流され小さな弟がさらわれてしまった友人もいた。その頃のきまつた現金収入は唯一伯父さんが毎月出してくれる一〇〇レバノンポンド(三〇米ドル)で、とても十四人の世帯は養えなかつた。

私達は国連に難民として登録せざるを得なかつた。そして国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)から食糧支給を受けた。

しかしUNRWA自身が言っているように一日一、五〇〇カロリーの
 かるうじて生存が可能という程度の配給だった。それでも飢えた人
 間は耐えることを覚えるもので、むしろ耐えられないのは、心づけ
 程度の食料をもらうのにカンや袋を持って列に並ぶ屈辱感である。
 私達は乞食になってしまった。物乞い用のボウルを出すまったくの
 乞食だ。その施しが個人からではなく国連から来るというだけの違
 いである。UNRWAの給食配分の写真を見ても大人が列にほとん
 ど並んでいないのがわかるでしょう。大人達は並ぶことがどうして
 も耐えられないので子供を代りに並ばせているのです。うちもそう
 でした。

一九五七年に姉達が学校の教師として働きはじめると、UNRW
 Aは配給を打ち切った。これは痛手だったけれど、配給の世話になる
 よりはずっと気楽だった。UNRWAのバレスチナへの最大の功績
 は教育を施したことだった。私は学校が好きだった。皆もそうだ
 と思うが、学校では配給の列のように数量として扱われるのでなく
 唯一人間らしく扱われる場所だったからだ。私は最初ティレの英国
 人学校へ行き、それからUNRWAの奨学金で隣町のシドンにある
 アメリカ系のミッションスクールへ通った。

私はペイルートのアメリカ系大学へ行くための奨学金もとって、
 薬剤師になるつもりだった。この辺りでは女性としてはまああの
 職業だった。けれども奨学金だけではペイルートでの生活を全部ま
 かなうことはできないし、家から援助を頼むわけにも行かず、一年
 間で大学をやめなければならなかった。これは私にとって大きな落
 胆だった。私はクウェートで英語教師の職を六年間勤めた。教える
 ことが特別好きだったわけではないが、家計を援けるためには働か

土が奪われ二十五万人のバレスチナ人民が新たに追放された。私は
 そのとき始めて解放のためには積極的に何かをしなければと決心し
 た。これはイスラエルがその軍事的勝利の代償として失った最大の
 失敗であった。それはイスラエルに対する武装闘争に立ち上る新し
 い世代を生み出したことだ。そして私はPFLPに加わった。去年
 の夏私はPFLPでコマンドとしての十分な訓練を受け、その後こ
 の任務に選ばれ訓練をうけたのだ。

17時28分 方位一一八度
 イスラエルのミラージュは私達がレバノン・シリア国境を越える
 までつきまとい続けた。私は新ダマスカス空港塔にアラビア語で話
 しかけ、着陸すると告げた。許可は要請しなかったが右側の滑走路
 へ着陸してよいと言ってきた。しかし燃料が非常に少ないので一番
 近い左側の滑走路へ着陸したいと伝えた。

機内放送で私は客室乗務員に、着陸次第乗客を非常口から避難さ
 せるように命じた。すぐに機を爆破するからだ。機長には、空港ビル
 に近づきすぎないように着地したらすぐエンジンのスイッチを切る

なければならなかった。兄の一人は技師の資格を取ってアラビア湾
 のアブ・ダビで働いていた。別の兄は商業経営を学んでやはりアブ
 ・ダビの銀行で働いている。皆の働きで我が家の暮しは又楽になっ
 た。ようやく妹を大学に行かせる余裕ができたと思ったら、皮肉な
 ことに彼女はフェグーイン（バレスチナ抵抗戦士）になることを望
 んだ。兄の一人も私も専任のフェグーインだった。

レバノンの友人達は私の母に、今でもまだハイファに帰りたいの
 ですか」とよく聞く。母の答えは「ええ明日にでも。苦勞をして、
 今では楽になったわ。すてきなアパートに住んで、充分食べて行け
 るし、子供達の教育資金も、テレビなんてぜいたく品もあるわ。そ
 れに、私はティレで生れたレバノン人だし、よそ者じゃない、ここ
 は私の国よ。でも故郷じゃない。故郷はハイファよ。」

私は、自分が難民というものなんだということに六、七歳の頃にな
 って知った。近所の子供と喧嘩したときにその子が「お前は難民
 だ。生意気いうな」と私に言った。どうしてもバレスチナ問題に目
 ざめないで済ませられないのだ。両親はハイファでの昔の生活を話
 すし、友人達はキャンプで不自由な生活をしている。学校でもパレ
 スチナのことを勉強する。十六歳の時まで私は、秘かに、アラブナ
 ショナリスト運動のメンバーになり、統一された社会主義アラブ世
 界の中でのバレスチナの解放を信じていた。兄と姉は私より先に加
 盟していて、私達は計画したり、夢想したり、論争したりした。私
 はバレスチナの残された領土ウエストバンク地方に行き、祖国を知
 るためにそこを旅した。

17時25分 方位〇七〇度
 一九六七年の六月（六日戦争・訳者註）にバレスチナの全ての領

ように言った。それは無理だ」と機長は言った。では私がやります
 と言った私が、倒れて手榴弾が爆発するといけないのでブレイキを
 ゆっくりかけるよう命じた。実際には機長は非常にうまい着陸をし
 た。

17時35分 ダマスカス着陸
 揺れが止まらずに私は客室をのぞき、すぐに脱出して下さい」と
 と叫んだ。この瞬間、乗員はビツクリして私達を飛び越して客室へ
 駆けこんだ。彼らはワイシャツ姿だったので、友人は「上着を持っ
 て行け」と叫んだ。けれども誰も振り向きもしない。私も叫んだ。
 「操縦ごころうさま。」どういたしまして。副操縦士から返事があつ
 た。二分後に機内は殆んど空になった。非常口から飛び降りようと
 している四、五人に私は「ゆっくり、あわてずに」と言った。しか
 し彼らは、私が誰で何と言ったのかわかりもしなかっただろう。

私は機内が空っぽであることを隅々まで調べた。友人は爆弾を操
 縦室において飛び出して来て、私と並んで非常口のそばに立った。
 私は二つの手榴弾をファーストクラスの客室に投げ込むが早いか避

聴いてくれ子孫の同志諸君／このアジテーターのどな
 り専門の男のことばを／ボエジイの流れの音をかき消し
 ／ほくは跨ぐぞ／ちっぽけな抒情詩集どもを／生者対生
 者できみらと語りながら／ぼくは行く／きみらのコミュ
 ニズムの彼方へ／だがエセーニンもどきの唄うたいの／
 へなちよこ武士とはちがうんだぞ／ぼくの詩はとどくぞ
 ／世紀の山脈をこえて／詩人や政府の頭上をこえて

『マヤコフスキー選集』飯塚書店版より

宇野経済学コーナー特設
 機関誌パンフ等持込みOK

吉祥寺ウニタ
 書店

武蔵野市吉祥寺本町2-20-7
 (0422) 22-9618

難用シュートにすべりこんだ。友人は恐ろしい勢いで私の頭の上に降りて来た。私は足が折れたとは思ったが、すぐに立ち上がり二十米程走って爆発を待った。しかし何も起らなかった。中途半端に仕事を終らせるのはひどい苦痛だった。

友人は飛行機に駆け戻って爆弾を仕掛け直した。彼は非常に長身だったのでシュートからよじ登れた。私は彼のあとを追いかけて行った。機内での長い時間が経ち、彼は再びすべり降りて来て、私達は今一度駆け出した。まだ爆発しない……。二分後に大音響とともに機首が吹っ飛んだ。友人は燃料タンクを炎上させようと翼に多くの銃弾を撃ちこんだが、空っぽに近かったので燃えなかった。

これで全てが終った。ありがとう、私は独りごとを言った。誰も傷つけないですんだことでほっと安心し、非常にうれしかった。

空港ビルに向って歩き始めると、バスが来て、乗客や私達をのせた。私達はシリア人が空港ビルをかたづけの間半時間程バスの中で待たされた。ギリシヤ人のあの男を見つけて、私が友人とやったのよ」と言うと、彼は泣き出してしまい、私は彼を慰さめるために、シリア人のその筋に頼んで、お母さんに心配しないように電報をうってあげると言った。私達は乗客に煙草を勧め、子供にはお菓子をあげた。子供らは元気にそれを受けとった。

待ち時間に、私は何故ハイジャックをしたか、もう少し乗客に説明した。

私達が犯罪者だとお考えになるかも知れません。しかしそれは違います。私達は解放のために戦っているのです。アメリカはイスラエルにファントム戦闘機やナバーム弾を送り援助をしています。私達はアメリカ政府にも私達の抗議を思いしらせる必要があります。

私達は二十年前に故郷を追い出され、一九六七年にイスラエルは再び残った祖国を奪い私達を追い出しました。私達は自由を、祖国を取り戻すために戦っています。他の人にたとえ旅行者としてもイスラエルに行かないように伝えて下さい。私達はユダヤ人を敵視しているわけではありません。シオニズムと敵対しているのです。演説を終えると、カリフォルニアから来たという婦人が、英語を習ったのは「アメリカですか、イギリスですか」と聞いた。私の国です。シオニストが言っている程私達は無学ではないですよ」と私は答えた。

私はもう一度操縦士に会って、うまく飛べたかどうか聞こうと思った。パレスチナの話もしたかった。ヨルダンへ訪ずれてくれるよう招こうと思った。けれど会えなかった。パーサーの一人に会えたけれど、彼は脱出の際一人の婦人がけがをしたといった。私はお詫びを伝えて下さいと頼んだ。

私は別の抵抗運動の戦士と四ヶ月前に婚約していた。けれどいつになったら私達が結婚できるか誰にもわからない。

一つだけ、質問しても良いでしょうか。私は故郷を見るためにはまたもう一度ハイジャックをしなければならぬのでしょうか。

(原題UP,UP & AWAY:Information)
Department, BEIRUT, 1971

訳・三村 訓

★三戦士追悼特集

PFLPとテル・アヴィヴ空港闘争

アル・ハダフ紙一九七二・六・二二日号

敵の砦の真只中での勇敢な行動の政治的背景と戦闘的意義

パレスチナ解放人民戦線は、テル・アヴィヴ空港でディア・ヤシ村民虐殺行為に対する報復をなした後で次のような声明を出した。パレスチナ解放人民戦線(PFLP)は、占領された我々の領土にあるテル・アヴィヴ空港において今日、夕刻、殉教者のグループが行なった勇敢な突撃行動に対して、完全な責任を負うことを宣言する。この行動は六月の敗北の五周年記念としてなされた。そして、我々、人民大衆と世界の革命勢力の前に、この勇敢な行動が確認する諸原理を提示する。

まず第一に、敵の追撃と攻撃がどこにおいてなされようとも、反動的・帝国主義的・シオニズムという敵との闘争における我々の対決の中で、それは基本的な重要性として残るであろう。今日、我々

の勇士たちが遂行した行動の如きは、前線の強化のため、シオニズムという敵の生存手段の補給の動脈を断つたものである。それ故に、このような行動は、我々の占領された領土におけるシオニズム・植民地主義の存在との闘いの行動方法として正当性をもっているのである。

第二に、アラブ祖国解放運動の勢力に直面して、帝国主義の攻撃は我々の領土においてその地位を強化しようとしており、シオニズム・帝国主義の支配により広汎な反動を行なおうと努力している。

この帝国主義の攻撃は、一九七〇年九月以来、野蛮な悪意の烙印を押されている。これは、ヨルダンにかけられる抵抗に対する弾圧の中に示されている。また、他の多くのアラブの地における抑圧にもみられる。……(中略)……

第三に、帝国主義の攻撃とそれがもたらす結果から、パレスチナ抵抗運動を含む愛国的プチーブルジョワジーの組織の若干の努力が行なわれた。そして、この野望を挫き、その存続を不可能にした。

さらに、この組織がもし望む場合には、自由に行ないうるようなはっきりした目的を保証し、必要な時にはそれをおしとどめることとこの組織のそれに対する便宜とを保証した。

(中略)

第四に、帝国主義の攻撃と同じく、ヨルダンの反動権力が行なっている狂気の活動は、その存続をはかろうとする政治的解決を上首尾に遂行することはないだろう。「アラブ連合王国」のもくろみ、この破廉恥な企ては、パレスチナ人民に対する代理人としての自己を強化しようとするこの手代の組織による自暴自棄の努力なしには行なわれなかつたものである。しかし、我々パレスチナ人民は、このような努力がどのようになされようとも、目的を完遂する。このような努力は、イスラエル側に結びついたものであれ、ヨルダンの反動的組織に結びついたものであれ、不毛な努力であり、パレスチナ人民の願望に由来するものではないし、パレスチナ武装抵抗運動のようにその正当な代理人と見なされるべきではない。

六月の敗北の第五回記念として

第五に、我々アラブ民族に対するシオニズム・帝国主義の敵対行動の第五回目の記念、これは、革命的大衆との約束を確認するためには、革命家たちにとっては好都合なことである。たとえ我々の手がどこまで続こうとも、我々、抬頭しつづつあるアラブ民族と殉教者たちの魂は犠牲の火の尊きことにおいて結びつく。我々は、我々の勇士の血とどのような困難の前においても不撓不屈であるという決意とによってこの約束を果たすのである。敗北五周年記念は、我々の占領された領土の中央にある敵の砦の真只中においても、最も

峻厳に以下のことを知らせるために、革命家たちにとっては絶好の機会である。すなわち、六月五日の戦争はまだ終わっていないのであり、帝国主義とシオニズム、反動勢力の抑圧下にある大衆が新しく蘇生し、奪取された我々の祖国に向かって進撃し、敵を撃破するであろう。また、祖国の貧民、難民・世界における革命・解放勢力は勝利に向かって前進し、我々の祖国の上に横たわる敵の棺架に新しい釘を打ち込むであろう。

第六に、我々の勇敢な戦士が敵の砦の真只中で行なつた偉大な行動によって、彼らは、歴史的な突撃を行ない、勝利の決意によって不撓不屈であるという信仰をもつ革命的戦士に対する模範として世界の先頭に立っている。この行動は、この勝利への道において、戦闘方法としてすぐれたものであり、また、その生は大衆の奔流の中の一点としてしか存在しえないという深い信仰の故に、持つべき最高のものである。この勇敢な行動は、我々パレスチナ大衆の進路が立ち止まることなく、世界の革命勢力との組織的同盟にある、ということをはっきり改めて証明したものである。

(中略)

第七に、我々の勇士たちが行なつた勇敢な突撃行動は、我々の戦闘的歴史の決定的時点において、最も高度の勇氣と犠牲心とを確認した。

①我々が直面している解決のいかなるたくらみも、我々大衆の闘争統行の決意と我々の目的遂行の過程における最高度の犠牲の前には障害となりえない。

②包囲と封鎖と飢餓をもたらそうとするいかなる努力も、我々の革命へと前進し、この敗北の想い出をすぐには拭い去ることのでき

ない地域においてはどこでも敵に打撃を与えよう、という決意の前には障害となりえない。

③我々、パレスチナ人の現実をあたかも革命の観点からはもう終りをとげたかのように描き、解決の企みを遂行しようとする用意を描き、我々大衆に武装抵抗は失敗したと示唆し、占領状態が繁栄と歓迎と平和のうちにあるかのごとく描こうとするシオニズムと帝国主義と反動勢力の攻撃、これらは全て、長くは続かない嘘以外の何物でもない。

ゲリラ虐殺にこたえて

第八に、今日、行なわれた突撃行動は、モシエ・ダヤーンとその手下どもが、冷血に勇敢なゲリラに対して行なつた虐殺に対して、革命的にこたえたものである。この虐殺は、イスラエル人たちが彼らを殺すことによつてパレスチナの革命的行動に打撃を与え、見せしめとすることに行なつたものである。ダヤーンの行なつたこの虐殺に対する我々の革命的な応答はさもしい偽瞞の結果として流された勇敢な血を伴つた。また、この応答は、パレスチナ人の革命的行動が新たな革命的行動の爆発にしか導かないことを占領者たちに示し、戦士たちの死が新たな戦士たちの出現にしか導かないこと、シオニストの虐殺者、ダヤーンの流した勇士の血が大衆の河の中に流れこみ、いかなる生活の敵に対しても勝利するまで奔流のように流れるであろうこと、を示したのである。

この行動の人道主義的側面

第九に、今後、この行動を人道主義的観点から語り、無実の人が

殺され、危険にさらされたこと等々を述べたてて利用しようとする多くの企てがなされることであろう。この点に関して我々にとって重要なのは、それが不可避的に総員に対するものになるということであり、彼らの頂点にはシオニストの虐殺者たちがいることを想起することである。同様に、学校の子供たちに対して、またエジプトの工場労働者に対して、ヨルダンの人々に対して、またレバノン南部の村の人々に対して行なわれた虐殺を銘記し、この虐殺をもう昔のことである、と考えない限り、すぎ去るものではないことを銘記しなくてはならない。我々の頭上に剣をふるうことのできない無実の人々という主役は、我々に対して向けられただけのことである。テル・アヴィヴ空港への旅行者は我々の見解によれば無実の人々ではない。彼らが旅行地として我々の占領された領土を選んだということ自体、敵に対する加担になるからである。我々は、彼らがいかなる形をとろうとも無実の人々とは見做さないのである。パレスチナ解放人民戦線は、一九六九年九月に発表された宣言の中で、占領されたパレスチナに行かないよう旅行者に対し警告を行なつた。解放戦線は、いかなる人であれ、この宣言の内容を知らない、ということに対しては責任を負わない。

戦士たちは外部より戦う

おお、戦う我らの人民大衆よ

おお、我らアラブ民族の貧しき子らよ

おお、世界の革命勢力よ

我々の勇士たちは、諸君の革命的精神の中で、どこにおいても、いつまでも生き続けるであろうし、彼らを継承するところではどこ

でも生き続けるであらう。

この勇敢な行動における世界革命の戦士たちの連帯が新たに確認された。ちょうど、殉教者によって世界的基督の上に於ける革命諸勢力の間のゆらぐことのない組織的共闘と同盟という性格が確認されたかのようである。この連帯は、世界の革命勢力のみが、連合し、搾取し、至るところで貧しい諸民族を圧迫している敵の兵営と対決していることを立証した。また、これらの敵に対して革命勢力を孤立化させるような時は過ぎ去ったこと、諸民族のプロレタリア的連帯の旗がパレスチナにおいてもヴェトナムや世界各地と同様に高くひるがえっていることを示したのである。

ディア・ヤシン村虐殺に対する報復行為を行なった殉教者のグループの勇士たちは、数千マイルの彼方より、シオニズムと帝国主義諸勢力に対する戦いにおいてパレスチナ人民と連帯するためにやってきた。そして、人々の魂をこの勇敢な行動によってパレスチナの地に導き、革命的諸民族のプロレタリア的連帯の基礎をきつき、世界に対して、パレスチナ問題はパレスチナ人民だけの問題ではなく、それは現代における抑圧され、搾取されている人々の問題であることを立証したのである。パレスチナ人民は尊敬と賞讃の目でこの三人の勇士を見るであらうし、パレスチナ解放のためにその魂を犠牲として捧げたパレスチナのいかなる戦士にもまして、これらの人々に注意を払うことであらう。

パレスチナ解放人民戦線は、我々の闘いに連帯してきた革命勢力に対して、その革命家たちの血がパレスチナの革命家たちの血と、どこよりも強くパレスチナの地においてこそ混じり合うことを確認してきたのであるが、我々パレスチナ人民の闘いが見出した連帯を

こんちにち、はつきりと示した。また、このインターナショナルな先駆的行動によって、この革命勢力に対して深い尊敬の念を示したのである。この行動と被占領地におけるわれわれの革命家との共闘のみが、シオニズムという敵を打破する戦略を内部において強化し、敵に打撃を与えることの困難さを減らすことのできる所ではどこでも、外部においても同様である。敵の心臓部をめざす今日の行動は、人種的な植民地主義の偽瞞を打破すること以外にはありえないし、この突撃的行動を行なった戦士たちとパレスチナの地で勇敢な行動を行なった同志との共闘は、敵とシオニストにその堅固な要塞も、我々の愛するパレスチナの地にいる虐殺者たち——後らの頂点には虐殺者たちの長たるモシエ・ダヤーンがいるのであるが——我々の勇敢な革命家たちのライフルより離れているのではないことを覚え、テル・アヴィヴ空港における殉教者たちは、敵と篡奪者に打撃を与えるための卓越した指導者として我々と全革命勢力を駆り立てる以外の何物でもないことを覚らせるのである。

行く手はどこまでも続く

おお、我々パレスチナ人民大衆よ

おお、全ての地における革命勢力よ

パレスチナ解放人民戦線は、その誓いがいつまでも完全であるように不滅である。この革命的組織は休戦することもないし、小細工をすることもないし、勝利の完遂に対する全ての信仰をもって、闘いの道を進むものである。そして、それを妨げるいかなる困難をものともしないし、その名声と戦争行為の遂行に対するさもししい企ての微候をもものともしないので、次のような確信を持つのである。す

なわち、前期間にわたる革命的戦闘の道は、パレスチナ解放と統一された民主的社会的建設のための闘いをめざす我々人民大衆の道である、という確信である。大衆の潜在力を最高度に、闘いの長い年月にわたってひき出すことのできる革命組織の指導の下にある大衆の闘いは勝利を実現せずにはいない。今日における歴史的勝利を記している勇敢なヴェトナム人民の闘いの如きは、抑圧され、植民地化され、搾取されている諸人民の教訓なしにはありえないのである。

パレスチナ解放人民戦線は連合した帝国主義という敵に対して勇敢な闘いを行なっているヴェトナムの革命家たちを生気づけ、彼らに祖国の解放と外国の帝国主義を駆逐し、国土を統一できるような、その成功と進展とをきわめて強く望むものである。これらの諸目的について、我々は、その実現は我が人民や他の諸人民の闘い、資本主義世界における革命勢力の闘いに対して大きな便宜をもたらすものである、と信ずるのである。

アジア諸民族の連帯と闘いの旗は高くひるがえっている。我々の目の前で、殉教者たちの血が輝いているし、どこまでも続く闘いの道を照らす光が目の前にある。

もう一つの四項目声明

この後、人民戦線はもう一つの声明を出し、次のように述べた。テル・アヴィヴ空港で昨日の夕方、我々の革命家たちが突撃行動を行ない、多くの敵を倒し、殺し、負傷させ、二名の同志が死に、三人目は捕えられたのであるが、この勇敢な突撃行動の二十四時間後にパレスチナ解放人民戦線は次のような諸点を声明した。

途上における革命的烽火

①パレスチナ解放人民戦線は、二人の勇士が類い稀な勇氣と深い信仰とをもつてその任務を完全に果たして倒れたこと、および以下のことを宣言する。すなわち、どこにおいても帝国主義に対する全世界の大衆の闘いのインターナショナルな連帯のはじまりにおいて、またこれに類する微候のある全ての所でも不撓不屈であり、時と場の好都合である至る所においても敵を攻撃することを、人民戦線は全世界に対して、インターナショナルな闘いの連帯が人民戦線の理解する意味において、またその実践において、シオニズム、すなわち帝国主義的世界的拡がり依存し、諸民族の血を吸うことによつて生きている反動的な運動に対する闘いにおける力強い基礎を形成することを、誇りをもって明らかにする。

勇敢な日本人ゲリラたちは、解放された人間の未来に対する忠誠を求める道を歩んだ。そして、労働者階級とその前衛の運動に対する運動の中で、最も深くその責務を果たし、帝国主義とシオニズムの墓穴とともに掘り、世界における高邁な戦士たちのスローガンを達成し、パレスチナ革命の一員となったのである。これらのゲリラたちは、パレスチナ大衆の闘争の過程で、新しい戦士の一団をみちびく烽火となるであらう。これは決して消えることのない烽火である。

非軍人と軍人

②日本の三人の同志たちは、この作戦の中では、重要であると考えられたこの作戦の諸部分を分担して行なった大きなグループの一

部である。この作戦を行なった残りの同志たちは、その定められたところに従い、その基地に帰還した。

③イスラエルが企てているのは、ゲリラたちは占領された空港で非軍人、軍人の区別をしなかった、と主張することによって好意と注意をひきつけることである。パレスチナ解放人民戦線は、このようなさもしい偽瞞をシオニズムの利益のために利用しようとするような主張を手段として使うことを厳しく批判する。

パレスチナ抵抗運動は、人種主義的イスラエル国家は定住的植民の上に依拠している、とみなす。パレスチナ人民の死体の上に自らに同国人の名を与えている暴奪者たちには軍事的性格と非軍事的性格の区別が現実的である、と考えられている。イスラエルの責任ある人々は、何度も、軍事的性格がイスラエル社会にあることを自ら立証してきた。すなわち、略奪行為に参加したいかなる者も「無実の同国人」であると考えられるほどなのである。

パレスチナ抵抗運動はイスラエルへの旅行者に対して何度も、我々の民族の歴史において悲劇的で忌まわしい特徴をつくり出した流血の関係について警告してきた。そして人類の歴史は、パレスチナ大衆が燃えるような戦場とみなしている地にいることが責任がないということに対して警告しているのである。この関連で、パレスチナ解放人民戦線は、その理由がどうであれ、イスラエルに行く全ての訪問者・旅行者に対して改めて警告を発するものであり、その訪問・旅行は占領の目的に奉仕するものである、と警告する。

警告・苦痛の最もはげしい所へ我々は戻ってくるであろう。

④パレスチナ解放人民戦線はこの行動の企画および実践について自分のみが責任を負う、と確信しており、この行動は、まったく、いかなるアラブの地を利用しないで、アラブの祖国の外で完遂されたことに注意を払っている。この確信は、アラブの地がゲリラの活動を禁じている、とみなすことを目指しているものではない。むしろ、第一段階において、関係者全てに対して、人民戦線がレバノンにこの作戦に関連することに対して責任のしるしを負わせることには関心をもっていないものの、レバノンにおける十分な情報活動の可能性を利用することが必要であることについて警告するものである。

我々はこれに関連して次のことを警告する。この警告が考えられる限り真剣にうけとられることを望むものであるが、レバノンや他のアラブの地に対してのイスラエルのいかなる行動も長続きしないであろうし、また、我々は敵の想像もしえないほど厳しく、そこに帰ってくるであろうし、苦痛の最もはげしい所で我々は攻撃し、敵にその評価がどうであれ、歩みを後悔させるであろう。我々はこの警告を確信し、その一字一句を強調する。そして、敵に対し全世界の前でその軽率さと偽瞞とその努力している栄光の約束の責任をとらせるのだ。

敵を放逐するためのインターナショナルな闘いはどこでも生きていく。

わが大衆に勝利を

その革命的未來に栄光を

逃亡しつつあるイスラエルに死を